

ならず。

○
宇宙は活動し、萬物は進化す、活動は天地の常態にして、進化は自然の法則なり。人、其中に生れ、其中に育す、パウルゼンいふ、「宇宙は活動なり、而して其組織は汝の腦中のものと同一なり」と、仰て天を望み、俯して地を見る、四時行はれ、萬物育す、吾れ其れ何の時か安を偷むの際あらむ。

○
カーライルいふ、若し大石道に横はるあらば、懦者は見て以て行路の障碍と爲し、勇者は見て以て進歩の楷梯となさむと、進取不息こゝに汝の成功あり、不屈不撓こゝに汝の満足あらむ。

○
新年頭に立ちて誰か梅花と共に自ら新たならむを欲せざらむ、年窮歳盡に對して誰か霜鬢明朝又一年の慨なからむ。悠々たる天地、もとより時間の劃すべきなし、人は徒に年に新

舊を分ち、月に去來を定め、自ら煩悶し苦惱す。愚なるが如しといへども、これ一種の興奮劑なり。人生は此區劃によりて其惰氣を警醒す。

○
「一句、乾坤を定め、一劍、天下を平ぐ」、丈夫須く此慨なかるべからず。冗舌多辯、紛々裏に没頭し、小機小畧、事擾々、嗚呼、「茫々たる宇宙人無數、幾箇の男兒か是れ丈夫」

自省寸言

○
宇宙の大を想ひ、人間の少を念ふ。何人か不安の感なからむ、既に不安の感あり、又慰安を求むるの情なき能はず。慰安果して得らるべきか、又終に得らるべからざる乎。得らるべからずとせば此の悶々の情を奈何せむ。得らるべしとせば、これ抑も什麼のものぞ。科學か、あらず。哲學か、あらず。文藝か、美術か、否なく、彼等は時に半面の慰安を與ふることあるべきも、未だ以て心靈の根柢を慰め、安を其の全面に與ふる能はざるなり、

唯だ宗教、然り唯だ宗教のみ此要求に應ずべし。

○ 宗教は有限相對の我をして無限絶對の彼と融合せしめむとするものなり。么微の我をして宏大の彼と同化せしめむとするものなり、人をして神と接觸せしめむとするものなり、衆生をして佛陀と圓融せしめむとするものなり。

○ セント、ベルナード、曾て宗教意識の四階級を論じて、

- 一。己の爲めに己を愛す、
- 二。己の爲めに神を愛す、
- 三。神の爲めに神を愛す、
- 四。神の爲めに己を愛す、

と爲しぬ。己の爲めに己を愛す、これ自利主義なり、爲我主義なり、宗教と相與らず、己の爲めに神を愛す、これ宗教思想の尤も幼稚なるもの、神に倚りて何等かを得むとするも

の、畢竟自利を離れず。神の爲めに神を愛す、これ全力を神に捧ぐるもの、其信仰は熱烈なりと雖、未だ人生と相渉らず、神の爲めに己を愛するに至て初めて宗教の眞面目を見る。

○ 宇宙は大にして我は小なりと雖、我、宇宙の外にあらず、天地は無限にして、我は有限なりと雖、我、天地の外にあらず。天地我を失はゞ其無限を缺き、宇宙我を失はゞ、其大を誇るに足らず、我は宇宙の一員たり、天地の一物たり、一物一切に互り、一員、全體を盡くす。宇宙は神の顯現なり、天地は佛陀の法身なり。柳は染む觀音微妙の色、松は吹く説法度生の聲、我、何處にか不安を抱くべき。

○ 幼兒の母の懷に安らげき夢を結ぶが如く、我も亦天地の懷に平安の興趣を味はむ哉。

○ 堅氷は之れを碎かずむば器に盛る能はざるも、融けて水とならむか、能く方圓の器に隨

ふ、汝の我執を碎け、そこに汝の平安あらむ。

○ 天地同根、萬物一體。森羅たる差別はこれ現象の影のみ、此影に迷ふて我執あり。我執破し盡くすの時、渾然融合、天地と我と何の異なる所かあらむ。

○ 吾、米を食ふて生存し、米、土を食ふて成長す、然らば土は米の親にして我れは實に其孫たり、我、今茗を啜るの茶器と何の渉る所なきが如しと雖、焉ぞ知らむ父母未生以前、曾て互に手を携へて嬉戯したる親友なるなからむや。觀じて此處に至る、天地同根、萬物一體の理、いよ／＼明かなるを覺ゆ。

○ 與へて云へば千狀萬態、奪つて云へば同根一體、千狀萬態なるが故に苦樂昇沈、明暗黑白。同根一體なるが故に萬里雲盡きて長江水清し。

○ 寶所遠からず、無爲の珠玉は汝の胸にあり。徒らに慰安を他に求むるの愚を學ぶ勿れ。脚下を照顧せよ、清風徐ろに起らむ。

○ 我が智限りあつて我が思ひ限りなし、我が思ひ限りなくして、我が力限あり。限あるを以て限なきを求む。これ徒勞のみ。汝の小智を棄てよ、汝の小力を抛てよ、そこに汝の自由あり、汝の慰安あらむ。

○ 客感閑想 交も起りて心緒亂れて麻の如きの時、しばらく俗務を放下して靜思一番せよ、靜思は雜多なる思量を統一して最高眞理に近かしむる唯一の道なり。一步一步思量を統一して此の最高眞理に至りて初めて雲晴れて月明かなるが如く、應用自在活殺縱横、事に對して圓融無礙の力あらむ。

○ 天地悉く我が同情者たり、萬物皆な我を愛す、此間何の不安かあらむ、愛は力なり、我、

此同情を原動としてこゝに奮闘の活力あり、以て人生の本義を盡すを得む。

○
慰安をいふて活力を忘るゝ勿れ。活力なきの慰安は唯だ死あるのみ。嶮崖手を撤して絶後に復び蘇る底の覺悟なきもの未だ共に慰安を談ずるに足らざるなり。

○
自ら神を見たりと稱して獨り法悦に耽りて、更らに神の子として動くべき責務あるを忘れ、自ら見性したりと稱して枯木の禪を守るものは向上の死漢、予が望む所の慰安にあらず。

○
本來清淨身、何の不安あるなし、自ら我執によつて罪惡を作爲し、之れによつて自ら苦む。正眼國師の法語に巧妙の教訓あり。

「僧問ふて曰く、某は生れついて平生短氣に御座りまして、師匠もひたもの異見を致されますれども、なほりませず、私もこれはあしき事どもと存じ申して、なほさうと致し

ますれども、これが生れつきでござりまして直りませぬが、これは何と致しましたらば、直りませうぞ、禪師の御示しを受けまして、このたび直したうござります、禪師曰く、そなたはおもしろいものを生れ付けられたの、今も爰に短氣が御座るか、あらば唯今こゝへおだしなされ、直して進じやうわいの、僧の曰く、たゞ今はござりませぬ、何とぞ致しました時には、ひよつと短氣が出ます、禪師曰く然らば生れ付きではござらぬ、何とぞした時の縁によつてひよつとそなたが出かすわいの、何とぞした時も、我でかさぬに何處に短氣があるものぞ、そなたが身の最負故にむかふものにとりあふと、我がおもはくを立てたがつて、そなたが出かしておいてそれを生れつきといふは、難題を親にいひかくる大不孝の人といふもので御座るわいの、人々皆親の生みつけてもつたは佛心ひとつで餘のものは一も生みつけはしませぬわいの、然るに一切に迷ふ我が身のひろき故に我が出かして、それを生れ付きと思ふはおろかなことで御座るわいの、我が出かさぬに短氣が何處にあらうぞいの、一切の迷も皆なこれと同じ事で、我まよはぬに迷はありませぬわいの」

○ 我執を伏断せよ、自ら心裏の我執を伏断するの勇なきもの、何ぞ以て活社會に奮闘するを得む、これ心裏の我執は我を苦むるの大敵なり、此大敵を伏断せずむば苦悶永く去る時なかるべし、猛進一番、身を挺して其本營を突け、慧劍豈に無明を断するに足らざらむや。

○ 我執断じ盡くして煩悶何の處にかある、天地は慈悲の眼を垂れ、萬物は相愛の情を寄す。我れは宇宙の寵兒なる哉、空飛ぶ鳥は我れを慰め、野に咲く花は我を喜ばしむ。樂園、此處にあり汝何ぞ速に見ざる。

○ 驀直に進前して顧慮するなかれ、これ丈夫世に處するの道なり、瀑布は途なきに途を開く、丈夫兒須らく此の如くなるべし、爲すなきを苦むの徒、終に成すなきなり。

○ 自繩自縛、人は自ら心に繫縛せられて、心自ら苦む、道信會て僧璨に問ふて曰く、如何

なるかこれ解脱の法門と、僧璨答て曰く、誰か汝を縛する、嗚呼誰れか汝を縛する、我、吾を縛して自ら苦む、自己の事は、自己これを處理せざるべからず、自ら解脱せよ、そこには自由の境あらむ。

○ 山いよく高くして、谷いよく深し、迫害ますく多くして、意氣いよく壯なるもの、これ以て眞の丈夫兒と爲すべし、見すや、花は雨の過ぐるに従ひて紅ますく色を添え、柳は風にもまるゝに従ひて翠いよく濃かなるを。

○ 鏡は形方寸なれども能く萬象を浮かべ、月は大さ五十由旬なりといへども、能く草露に宿ると、小なる我は大なる宇宙に合し、大なる宇宙精神はまた小なる我に宿る。

○ 平賀源内は面白き男なり、彼れ會ていふ、「大石内藏助も遊里に在りては面白きこと世の風流の士とさのみ異なることなし、只敵を討つことを忘れざるなり。主親の敵をのみ敵と

思ふべからず。人々志す所、家業藝術、皆な敵を持てり、討たずんばあるべからずと、行住坐臥にこれを思へば、敵を討と知るべし、興に乗じて酒を呑むとも、酒に乗じて興を呑むことなかれ」と、これ一種の奮闘主義なり。

○
才は劍の如く以て身を保つべく、以て身を殺すべしと、志は其れ弓の如きか、絃を張つて初めて用ふべく、絃、一たび弛まば終に用なし。

○
忍辱經に曰く、寧ろ利刀を以て其の腹を貫くとも、慎みて悪を履むことなかれ、寧ろ須彌を載いて其の身を壓死すとも、慎みて悪を爲すこと莫れと、秋霜烈日、以て佛陀の人格を想見せしむ。

○
斷じて行ふ鬼神も之れを避く、丈夫事を行ふ須らく此斷なかるべからず、天下尤も憐むべきは千思萬慮あつて、一斷なきの徒なり。

○
伊勢の俳人大淀三千風に行脚の掟あり。

一、不惜身命と思ひ定め、今日切の境界、無常迅速夢幻泡影忘るまじき事

一、色欲身欲名聞欲を離るべき事

附、僞慢心可慎事

一、五戒勿論也、但し飲酒妄語の二戒は事によるべし、他の爲善事には僞も可なるべき事

一、山賊追剝等に逢ば裸にて渡すべし、若し殺害に及はゞ首のべて待つべし、死で敵を取らまじき事

附、四寸の小刀の外、又もの持間敷事

一、衣食居は天道にまかすべし、當季の外衣を捨つべき事

一、船賃茶代少しもねぎるまじき事

一、中途にて乞凶非人に慈悲を加ふべし、かつ病人には所持の藥可與事

朝思暮想

一、文學所望なきに書くまじき事、但し望む人あらば貴賤を撰ばず一言も否といふ詞出
すまじきなり、自作の外、他作の文法書くまじき事

一、一足も馬籠に乗るまじき事、但し不及山上の道は折によるべし。

右の九ヶ條佛神に誓ひ心戒を定るものなり、若し此意趣を破る心ざし出ば、即歩に立歸
るべし、若し病死することあらば、行脚の日記と共に七ヶ條を古郷へ送りたまふべし。

死で後、かばねの事は任他

取置ては烏狼

産國勢州射和村大淀氏三千風

諸國旅宿御中

と、これ彼れの自戒自慎として首にかけし條目なりといふ、其の大部分は以て人生旅行自
戒自慎たらしむるに足る。

版權所有



偉人の言葉

昭和十三年六月十八日印
昭和十三年六月廿五日發

刷行

定價金壹圓貳拾錢

著者	加藤 咄 堂
發行者	東京市本郷區動坂町三二七 橋本 大 平
印刷者	東京市神田區三崎町二ノ一一 百目木 智 璉

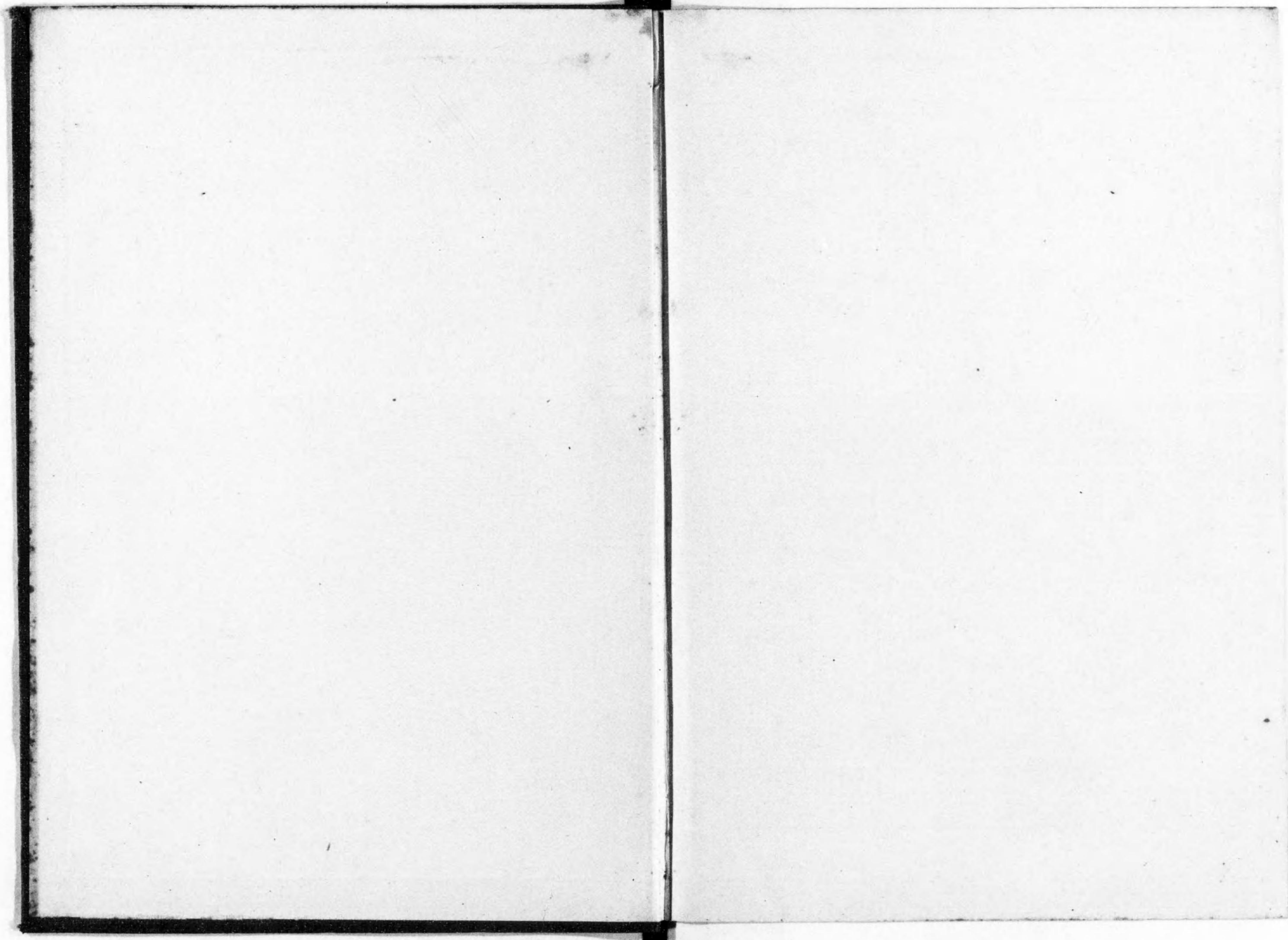
發行所

東京市本郷區動坂町三二七
電話駒込二九四三番
振替東京七〇六六一番

春潮社

大賣捌所

上田屋・東京堂・栗田・柳原・福音社・川瀬・星野・盛文館・菊竹・大坪



終

